

私の「環境力」について

石川 武 (いしかわ たけし／三共精機株式会社 代表取締役社長)

2013年度経営者「環境力」大賞をいただき誠にありがとうございました。大変光栄に感じております。今回は私の「環境力」とは一体何だったのか、まとめておこうと思います。

1. 環境活動とはじめ

三共精機は「ものづくりの課題解決」を業とする機械工具商社です。私は某信託銀行を退職し、2002年4月に36歳で入社しました。それまでとは全く違う業界で、当初は戸惑うことが多かったと記憶しています。入社後最初に責任を持って担当することになったのが、「KESステップ1」取得業務でした。KESとはISOの代替として、中小企業等でもより身近に安価に取組めるよう独自に開発された京都発の環境認証基準です。このKES取得が弊社喫緊の課題でした。それは当時、主に大企業が、取引条件の1つにISO等の取得を加える傾向になってきていたからです。京都ではKESも認知されていました。そこで会社としても私としても、初めて「環境活動」に着手することになったという次第、つまり最初は、業務として「仕方なく」という所から始まったということです。

2. 環境活動と事業活動

環境活動は「紙・ガソリン・電気」の削減から始まりました。しかし考えてみると弊社は商社です。生産過程で空気や水を直接利用する工場ではなく事務所仕事ですから、節約レベルで取組んでいてもそれほど大きく地球環境に影響する訳ではありません。また取組

みが面白くない上にすぐに限界がきてしまう。そこで本業の推進力と同じベクトルでと思い、2004年以来現在も取組んでいるのが「環境商品販売」です。これは弊社の環境活動は、弊社の社内で何かをやるより、顧客企業により環境に優しい生産をしてもらう方が影響が大きい、そしてこの活動は弊社の事業成長とも同期すると考えました。また2006年からは使用済み切削工具をリサイクルのために回収することも始めました。この辺りから私は、弊社の場合は環境活動と本業が結構リンクするなあと感じていたような気がします。

3. 環境活動のつながり

2008年には弊社が創立60周年を迎えました。その記念企画の1つとして「京都モデルフォレスト活動」への参加を決めました。これは弊社社員が京都の美山地区で植樹や森林整備に協力するという活動。企業としても還暦を迎え、これからは成長と同時に社会に何かを還す企業でありたいという当時の社長の願いを具体化しました。更にこの活動に弊社の独自性を加えたいと思って実現したのが、この活動資金に切削工具リサイクルの買取り金額の一部を充当するというアイデアです。還元というイメージが、森林の再生、切削工具の再生、そして森林と切削工具のつながりにまで広がりました。以後この活動は、「つながりの森づくり」と命名され、人と人、人と自然、現在と未来（大人と子供）をつなぐ活動として、7年目を迎える現在も年間のべ100名を越える参加者が集います。この活動を通して私

は、環境活動にとって最も大切なことは「実感」することだと思いに到りました。

4. 事業活動の転機

2009年4月期から、私が第3代目の社長に就任することになりました。折しも世の中は「リーマンショック」、世界的な不況の真っ只中でした。当時大学のインターンシップ生に、弊社の環境報告書を制作してもらっており、その中で私は環境活動を行なう理由について「当たり前のレベルを上げる」ためと書いています。例えば掃除。それは誰かに指示されてすることではなく、自主的に進んでするものであり、弊社は掃除された状態が「当たり前」と感じる人がいる会社でありたいということです。それは仕事に臨む心持ちや、顧客に接する態度に表れて来ると思うのです。リーマン不況、工場の海外移転、ネット販売の台頭で会社業績が急激に落込み、企業としての生き残り策を日々迫られていた時期に私が考えていたのは、弊社はどんな価値を提供できる会社になるのかということでした。それは「仕事の捉え方」にあると言うのが私の答えです。現場へのコスト低減提案が、資源の有効活用提案と同義だと気付いたのもこの頃です。

5. 「与える」から「学ぶ」へ

この考え方が、2011年に京都府から認証を受けた「知恵の経営」につながります。機械工具商社を「ものづくりの課題解決業」と捉えること、その中で私達の「介在価値」を発信して行くこと、それが弊社の本業の意味だと考えたのです。そして会社を成長させて行くのは「広義の学び」であると。技術的な知識は「狭義の学び」です。これは具体的な課題解決のために必要です。「広義の学び」とは、人間や社会や歴史や環境のことを知るこ

とです。それらを社員全員が知る努力をすることで、その会社は問題の発見の仕方や、課題の設定の仕方が変わります。そこに新しいビジネスチャンスを見つけることができます。そう考えた時に環境活動とは、私達が「与える」ものではなく私達がそこから「学ぶ」ものだと思えるようになりました。更に言うと、どんな仕事も上記のように捉える限り、環境への視点は本業そのものの中にきちんと組み込める要素なのだと思うのです。

6. 持続可能社会への挑戦

以上の考え方でKESから始まった環境活動と60年を迎えた事業の新たな経営を、自分なりにその時々でたまたま呼応した外部の企画等を交え、社員みんなで行って来て今に至っています。特別なことをしているとかCSRとか思わずに来たので、正直な所この賞を戴いた時も、よくぞこんな地味な取組みを見つけて下さったものだと思います。環境活動は持続可能社会の実現のためと言われます。弊社では2014年3月から障害者雇用支援を実践しています。精神に障害のある方を現在1名京都府から受入れ、荷受け業務を担当してもらっているのです。これも障害者雇用ありきではなく、業務の必然性から精神の障害者の方に適しているという解が出て、それをみんなで行って実現しようとした結果です。留学生採用、高齢者雇用、国際インターンシップ等の実践も、「多様」な視点で互いの不足をアナログにカバーし合おうという発想から生まれた、社会と会社の持続可能性への挑戦の形です。こうして考えると私の「環境力」とは、仕事を通じ多様な方々と接触する中で必然的に出来た、1つの「流れ」だったのではないかと思います。今後も様々な出会いを大切にしたいと思います。